

体育専攻学生を対象とした授業リフレクションについて

大庭 昌昭^{*1}

Reflection of Physical Education Class for Practice Teacher
Masaaki OHBA

要 約

体育専攻の教育実習生が実施する体育授業に対して、授業記録（ビデオによる記録と授業プロトコル）、オン・ゴーイング法による授業過程での授業観察者の授業認知の音声記録、授業後の授業者と実習生との対話リフレクションの記録を作成し、その記録をもとに実習生が自分の体育授業を振り返り気づいたことを記述させる試みを実施した。そして、本試行に関わった者に対して、それぞれの立場での感想（良かった点、悪かった点など）を、全プログラム終了後に記述してもらい、それぞれの立場から改善すべき点などを検討したものである。

その結果、多くのポイントが挙げられたが、次の3点が特に重要と考える。1) 授業者の発話を確実に拾うためのピンマイクを装着すること、2) 観察者の視点を広げるために、実習校の指導教諭に観察者を依頼すること、3) 出来るだけ指導案を早めに作成し、観察者や撮影者に配布すること、であった。

1. はじめに

専門職としての教員を養成することが強く求められている。養成を担う大学において、専門職としての実践的な力量を形成していくカリキュラムとしては、教育実習が最も重要である。しかし、決められた期間、ただ実習をこなすだけでは十分ではなく、実習校の教諭等から指導を受け、あとは実習生の自得に委ねるのでは、教員養成学部としての責任を十分に果たしているとは言えないだろう。

そこで、本実践では、教育実習生が実施する体育授業に対して、授業記録（ビデオカメラによる記録と授業プロトコル）、オン・ゴーイング法による授業過程での授業観察者の授業認知の音声記録、授業後の授業観察者と実習生との対話リフレクションの記録を作成し、その記録をもとに、実習生がこれらを読んで自分の体育授業を振り返り気づいたことを記述させる試みを実施した。

本研究の目的は、この試行（体育授業を記述する試み）を事例的に分析し、こうした取組を実施することの有効性について検討するための資料を得ることであった。

2. 方法

本研究の授業リフレクションの概要は、次の通りである。

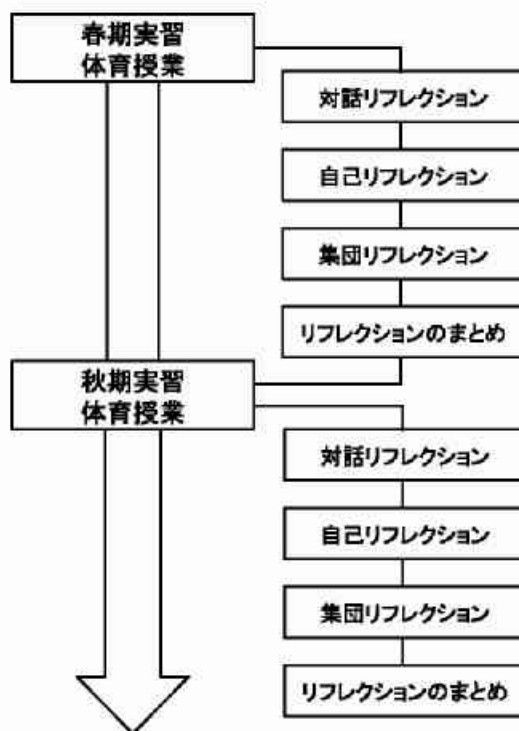


図1 授業リフレクションの概要

平成 18 年 2 月 28 日受理

^{*1} 新潟大学教育人間科学部

2.1 研究授業（体育授業）について

春期・秋期の教育実習後半に実施される研究授業を対象とし、授業の記録を実施した。2台のデジタルビデオカメラでの撮影・録音と、ICレコーダーを利用した観察者の授業場面での気づきの記録である。（図2）

1) 対象者について

実習生は、今回が初めての教壇実習となる体育専攻学生4名（3名は小学校実習、1名は中学校実習）であった。春2週間、秋2週間の計4週間の実習を実施した。各実習の第2週目に実施される研究授業（体育授業）を対象とした。

2) 撮影について

デジタルビデオカメラ2台により、授業風景を撮影した。1台は、移動せずに教師・子ども・活動場所全体が映るように広角で撮影し、もう1台は教師と子どもの関わりに焦点をあて撮影者が自由に記録した。両カメラとも細かな撮影方法については、撮影者の判断に任せた。

3) 観察者について

観察者は、3名（大学指導教員、大学院生、学部4年生）で、オン・ゴーイング認知法により、授業事象に関する気づきを内言発話し記録した。大学指導教員は、自由な場所で自由に観察しICレコーダーに記録した。大学院生及び学部生は、上記2)の授業風景の撮影をしながら気づいた点をそのビデオカメラに記録した。

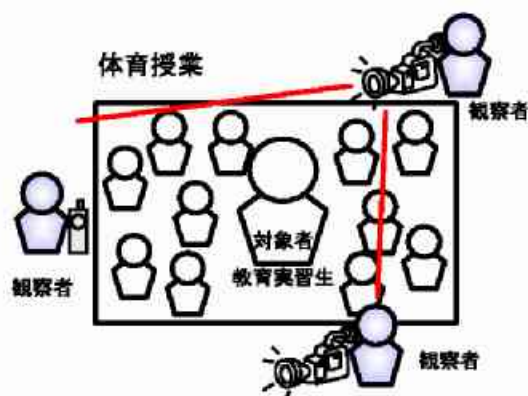


図2 体育授業の撮影・記録の概略

2.2 対話リフレクションについて

観察者が対話者となって、授業終了直後に実施した。教育実習生が実際に授業を実施して考えていること等を、授業内容の振り返りを促すように対話した。対話者はできる限り、授業者の率直な感想や気づきを導き出すように心がけ、観察者の主観や感想は極力抑えるように対話した。

2.3 授業事象プロトコルの作成

対象者に、教育実習期間終了後、撮影された映像及び観察者の発話記録をもとに、授業事象プロト

コル（教師の発問・働きかけ、児童の反応、観察者の授業認知を時系列でそろえたもの）を作成させた。

2.4 自己リフレクション

対話リフレクションの記録及び授業事象プロトコルを何度も読み返して、授業者として気づくことを出来る限り詳細にまとめさせた。

2.5 集団リフレクションについて

自己リフレクションでまとめた「気づき」について、集団（他者）に対して説明させ、授業場面での授業者としてのあり方などについて討論を行う。また、討論の全てをICレコーダーで記録し、集団討論の記録として文字化した。

2.6 リフレクションまとめについて

授業事象プロトコル、対話リフレクション、自己リフレクション、集団討論の記録、について再度振り返りを行い、実習を通してのまとめを実施した。

2.7 授業リフレクションの試行に関わっての感想

春秋の教育実習における授業リフレクションの全てのプログラムを終了した後に、本試行に関わった者に対して、それぞれの立場での感想（良かった点、悪かった点など課題について）を自由に記述してもらい、全体で検討した。

3. 結果及び考察

3.1 教育実習生にとっての授業リフレクション

表1-1（観察視点の重要性）に示すように、観察者のコメントに大きく左右される実習生の姿がある。観察者からどんなコメントが記録されるかがかなり重要になることが予想される。

表1-1 事例1；観察者の重要性（対象者A）

観察者の方からのコメントに流されてしまう傾向が強かった。改善策として、コメントが入らない映像を見て、気づいた点を書いていくことにより、対話リフレクションの内容を含め、新たな視点が見つけれられたかもしれないと思う。

先生や先輩の方からなのでコメントは正しいと判断してしまい、影響された。それは経験があるから。これはその行動について「自信がない」とか「分からない」、もしくは「自分が納得している」ということが原因で、先生や先輩からのコメントに影響される傾向が強いと考える。

表1-2に示すように、授業リフレクションの試行ではあったが、振り返りの中で新たな自分への気づきがあったようで、本試行が有意義に働いた事例と考えられる。

対象者 B に対する観察者のコメントを見てみると、他の対象者よりも、肯定的なコメントが非常に多く見られた。

表 1-2 事例 2；肯定的なコメントの影響（対象者 B）

私は、子どもとの関わり方は意識して「何かしよう」という考えはありませんでした。そのため、子どもと関わる場面の記憶があまりありません。しかし、実際の映像や振り返り活動を通して、自然と関われる私がいることが分かりました。

表 1-3 に示すように、対象者 B とは逆に、授業終了後には、ほとんど気づかなかった自分の問題点を、リフレクションを進めることで認識している。いかにこうしたギャップを埋めていくかが今後の課題となりそうだ。また、現実を知り、非常に嫌がっている面もあり、実習生が自信を喪失するようでは、リフレクションが逆効果になるとも考えられる。こうした対象者へのサポート体制も大切と言える。

表 1-3 事例 3；自分の問題点の発見（対象者 C）

自分の授業を振り返ると、問題点がどんどん見えてきて、率直な感想で言っている事とのギャップを感じました。それは、自分の視点からしか見ていないことと、映像によって第三者の視点から物を見ることができるとのギャップなのだと思います。問題点がたくさん見えてくることは私にとって嫌でした。

また、そのたくさん挙がった問題点を、集団リフレクションで発表することも、私にとって恥ずかしく嫌でした。

しかし、恥ずかしがらず、素直に現実を直視し、自分の問題点を見つめることが、今回の作業での一番重要なポイントであると思いました。

表 1-4 に示すように、授業を実施して、ただちに授業事象を振り返るような余裕は、実習生にはないようである。対話リフレクションの実施方法についてさらに検討する必要がある。

しばらく時間をおいて、自分の授業をじっくり考える時間を取れるようになれば、こうした問題はやや改善すると考えられる。

表 1-4 事例 4；対話リフレクションの難しさ（対象者 D）

対話リフレクションの受け答えは、頭の中が整理できていない状況であり、逆に率直な感想が言

えなかった。10分程度、整理する時間があればと思う。リフレクションは時間がかかり大変であったが、教育実習の映像や資料を残せたことにやりがいを感じた。

3.2 撮影及び観察に関わる課題について

表 2-1 に示すように、授業者の発話記録については、体育授業のためマイクなどを装着することを控えたが、可能なかぎり付けるほうが良いと考えられる。

また、授業内容を事前に把握することで撮影がしやすいという指摘があり、指導案を事前に作成し終えることが必要である。しかし、教育実習生にとっては指導案作成自体が実習における大きな課題であるため、どこまでこのことを重要視するかは、今後検討する必要があると考えられる。

さらに、どの場面を見てコメントしているか良くわかるので、ビデオカメラへの記録は、観察者の視点を研究していくには有効な指標となる可能性が示唆された。

表 2-1 観察者 A（学部 4 年生）の主な感想

- ・ 教師、子どもともに話している声がひろいにくいのでカメラにマイクがあるといい（教師の発問など拾うため教師にマイクをつけてもらってもいい）。
- ・ あらかじめ授業でポイントになる場面を知っていると教師と子どもに関わる場面が撮影しやすいのでは。
- ・ 近くで撮影するカメラをもう一台増やすと、もっと子どもの学習場面が明らかになるのではないかな。
- ・ 全体撮影のカメラで音を拾うのは困難であるが、音が少しでも入れば全体の雰囲気はわかりやすいのでは。
- ・ ギャラリーのある場所では上から撮影した方が全体を撮影できそうである（下からでは全体を撮影するのが難しい）。
- ・ なんとなく思いついたところを撮影していたが、撮影ポイントがしぼれると撮影しやすい（例えば、教師と子どもがかかっているところを確実に撮影するなど・・・）。
- ・ ビデオを撮りつつ、コメントを入れるのはどういう場面に対してコメントしているかわかるので良いと思う。

表 2-2 に示すように、撮影者としては、A と同じ様に、授業の中で授業者の声を拾うことの難しさを感じていた。観察者としては、それぞれにメリット・デメリットがあるようで、見るポイントを制限されることの難しさを感じているようである。

表 2-2 観察者 B (大学院生) の主な感想

教師に焦点を当てて撮影する方と全体を撮影する方で交代で行なったが、教師にスポットを当てた方では、教師の動きを焦点的に見ることが出来るので、授業中の教師と子どものかかわりを詳しく見ることが出来ました。ただ、やはり動くのでその動きを追うことが難しかったです。また、教師の声も撮ろうと思ったのですが、どこまで近づけばよいかという判断が難しく中々教師の声が取れなかったという課題があると思います。

全体撮影のときは、全体でどのような動きをしているか分かりやすく、授業に集中していない子や、自分が動かないときの子を見ることが出来ました。ただ、定点撮影では少し対象が遠すぎて表情や雰囲気が見えづらいという課題があると思いました。

表 3-3 に示すように、大学教員としては、教育実習生の授業を参観に行くので、どうしても実習生である教師の行動を追いかけることに主眼が置かれるようである。また、自分自身が授業をするならば、という考えでの観察視点はあまりなかったようである。

表 2-3 観察者 C (大学教員) の主な感想

他の授業 (市小研授業) において、現職教員 2 名 (授業案づくりに協力した教員) とオン・ゴーイング認知法により内言発話を記録した。その結果から観察視点の違いを検討してみた。その結果からは、「管理者の気づき」という項目に大きな違いが見られた。つまり、授業を実施する側に立ってのコメントの有無に大きな差があった。

実際に指導案を検討して作った教員と、指導案をただ読んで授業参観に臨んだ大学教員との差が大きな理由であると考え、大学教員が小学校の教員免許を持っていないことも少なからず影響していると言える。

3.3 全体を通しての課題について

本リフレクションの試行を実際に担当してきた学生の感想をもとに、本試行の全体的な課題についても検討を行った。

表 3-1 (実習前) について考えてみると、リフレクション研究において実践的な力量とは、形式的な知と暗黙的な知が融合して成立するとされている。大学の講義などを通して学べる形式的な知についても力量不足であることが予想できる。教育実習に臨むまでにどのような力量を形成しているかも重要な要素であることが伺える。

表 3-1 実習前までの課題

- ・ 春期実習前は勉強会を開き、ある程度知識を入れることは必要。
- ・ 去年は実際に個人が種目を選択し研究をしたが、実際には役に立たなかったと思う。1人で作業するより、2-3人で作業する事で話し合いが深められると考える。
- ・ 秋期実習前では春期実習の反省を3点簡潔に述べ、その繰り返しをしないように対象者たちは努力する姿が見られたため効果はあった。

表 3-2 に示すように、試行をしてみて気づいた点が具体的に上がっている。撮影方法と対話方法に不慣れな面が見て取れる。

まずは、撮影・観察や対話等、繰り返し実施してある程度ポイントをつかんで出来るようにしていかなければならない面もあることが考えられる。また、実際に撮影者・観察者として関わった者と同様の課題を挙げており、さらに検討する必要があると考えられる。

表 3-2 実習中の課題

- ・ ビデオカメラをなぜ2台用意したのか。なぜ1台は全体を、もう1台は教師行動を記録させたのかを意味付けさせないままデータを収集してしまった。
- ・ ビデオカメラは1台で、教師と子どもの行動、施設・用具の様子を記録するだけでもいいのではないか。
- ・ 教師の指示・発問や観察者3名のコメントなどもあいまいな意味付けだった。
- ・ 教師にはマイクを着けて指示や発問を記録する必要がある。観察者には大学の教授・大学生で行ったが、実習先の担当教員にもコメントしてもらうべきだと思う。
- ・ 授業直後の「率直な感想は？」を聞いたのは良かった。一言目が「自分では良かったと思う。」と答える対象者もいた。後々自分の力のなさを気づかせるにはいいと思う。
- ・ しかし、その後の対話者の気づいた点を対象者に何点か聞いていたところでは、質問から指導に変わっていったところが良くなかったと思う。授業直後の対象者の考えのみを記録するだけでいいと思う。
- ・ 日誌も記録としてデータに残したほうがいいと思う。対象者の実習1日1日の変化が見られる重要なデータである。

表 3-3 に示すように、授業リフレクションが有効であることが、十分に理解できる。